ナナフシ

受賞作品概要

島田奈穂子

それに気がついたのは洗面台で朝の支度をしているときだった。ふとトイレタンクの上に飾った曇ざしのコナラの枝に目を留めた。

それは恋人と山へ散策に行ったときに、彼がわたしに拾ってくれた枝だった。細かい産毛が生えた健やかな枝に、小さな手の平のように葉が五片ついている。ある葉の茎に白い糸のような短い蔦が絡んでいることに気づいた。爪の先で触れようとすると、その蔦は茎の上を風に吹かれて浮遊するように、ふわふわと移動した。そして、ぽとり、とトイレタンクの上に落ちた。よくよく見るとそれは、二本の触角と、胴体と六本の足を持っていた。

「これはおそらくナナフシという昆虫の子どもだよ」恋人は小さいジャムの空き瓶に詰めたそれを、蛍光灯にかざして眺めた。

終業後に時間を合わせて、喫茶店でコーヒーを飲むのがわたしたちの日常だった。

瓶の中のナナフシはまだ人差し指の先ほどの大きさしかなく、やや緑がかった白で、光に照らされると透けているようにさえ見えた。「可愛い」思わず、そう形容した。「育ててみようかな」

「きみは虫が嫌いでしょう？」恋人は足を組み直して、テーブルに肘をついた。

「捨ててしまえばいいよ。近くの公園にでも放せばいいんだ。大きくなってから後悔しても知らないよ。格好良くも可愛らしくもない虫なんだから」

「じゃあ、あなたが捨てて」わたしは瓶を彼のほうに押しやった。「あなたがくれたんだもの、あなたに返すわ」

喫茶店を出て、ひとり冷たい風に身震いしながら歩いている間も、脳裏にあの昆虫の儚い姿が思い浮かんでいた。マンションの暗い部屋に入ったとたん、自分の孤独感の重苦しさに耐え切れなくなった。今、ナナフシがここにいればどうだろう？　むしろ、なぜ、ナナフシはここにいないのだろう？　わたしは靴脱ぎ場に立ったまま、携帯を探し出した。まだ会社にいるであろう恋人に電話をかけた。

「ナナフシを返してほしいの。もう捨てちゃった？」

「ああ、まだポケットに入っているよ。ちょっと待って」ポケットを探る気配がして「うん、まだ生きている」と恋人。

「やっぱり、育てたいの。大きくなって、気持ち悪くなってもいいの」

「わかったよ。今から持っていこう」

わたしはナナフシを迎えるために、二リットルのペットボトルを空けて、コナラを枝ごと入れた。部屋にやって来た恋人は、ナナフシをジャムの瓶からペットボトルへ入れ替えた。窒息してしまわないように、キッチンペーパーで蓋をした。

そのあとわたしたちは、床の上で必要なだけ服を脱いで愛し合った。すべて済ませると恋人は家に帰って行ったが、いつもと違ってわたしにはナナフシがいた。

朝、会社の更衣室のロッカーを開けると、ゴミの入ったコンビニの袋が足元に転げ落ちた。とくに気にもせず拾い上げてゴミ箱に捨てた。

問題は、ナナフシの飼育方法だった。昆虫に詳しい笹木というひとつ年下の男性社員に、教えを乞うことにした。彼は足が不自由で車椅子に乗っており、誰とも仲良くしない性格から敬遠されている存在だった。

社員食堂で昼食を取っている笹木に「わたし、ナナフシを飼っているの」と切り出す。

「節足動物門昆虫網ナナフシ目」彼は呪文を唱えるように言う。「木の枝や木の葉に擬態した体が特徴の、草食性の昆虫ですね。ご存知かもしれませんが、ナナフシのほとんどはメスです。単為生殖といって、オスなしでも繁殖します」

「よければ、子どものナナフシの飼育について教えてくれないかしら」

笹木はひどく痩せているわりに大食漢で、カレーとうどんを下手な箸使いで食べていた。ひとしきり食べたあと「若齢期のナナフシは、柔らかい葉を好んで食べると聞きます。手に入りやすいもので言うと、バラですね」と教えてくれた。

わたしは冬の花屋でとうの立った鉢植えのミニバラを購入し、若そうな葉を選んでペットボトルに入れた。翌朝、ミニバラの葉のところどころに葉脈を避けてかじられた小さい穴が残っていた。ナナフシと意思の疎通がとれた気がして、なんとも得意な気分になった。わたしは彼女を愛しはじめていた。

その喜びを伝えようと笹木に話しかけるが、彼は不意をつかれて驚いたのか、そそくさと車いすの方向転換をし、その場を離れていってしまった。

恋人はあいかわらず、ナナフシのいるわたしの部屋へやってくる。彼は咎めたり気味悪がったりしない代わりに、ナナフシ自体には無関心だった。

優しい恋人は、わたしが今以上を望まないことを知っていて、すべてを許してくれる。付き合う以前、わたしは彼の部下だった。きみのことを受け入れるって決めたからには、おれなりに覚悟もしているんだよ、と恋人は打ち明けた。わたしは嬉しく思う一方、まさか、と思っていた。まさか、あなたに覚悟などさせない。わたしはすでに、あなたから十分貰っているのだから。恋人はいつも、最後には自分の家へ帰って行く。

ナナフシは何度か脱皮を繰り返し、見る間に人差し指一本分の大きさになった。ある朝、わたしは不注意でナナフシの右前足を欠損させてしまう。落ち込んだわたしが、会社のエレベーターの中で恋人に打ち明けると、たまたま乗り合わせた笹木が「昆虫には再生能力を持つ種類がある」と話す。ナナフシの足も完全に元通りにはならなくとも、以前と同じようなものが生えてくると言う。

午後から予報外れの雨が降りはじめた。社員食堂で雨止みを待っている笹木を見つけてわたしは話しかけた。「ねえ、笹木君はナナフシを飼ったことがあるの？」

彼は今も自宅でナナフシを複数体飼育していると告白する。見せてくれるようしつこく頼むと、「また今度お誘いします」と曖昧に承諾してくれた。

笹木と別れ会社の玄関に向かったとき、恋人が直属の部下である女性社員とひとつの傘に入って歩いていくのを目撃してしまった。わたしはその後をつけ、カフェで談笑するふたりのようすを観察する。

その夜、わたしは見てしまったことを電話で恋人に話した。仕事の相談に乗っただけだと返される。彼の物言いに、嘘や隠し事があるようには思えなかった。

「おれはどうすればいいの？　どうしてほしい？」

「今まで通り、部下に優しくしてあげて。尊敬される上司でいて」わたしは観念して言った。

恋人はすこし沈黙した後こう訊ねた。

「きみはおれに何を望んでいるの？」

「何も望まないわ。ただ、覚えていてほしいだけ」

虫かごの中で、ナナフシは前足のない身体で葉を食べていた。わたしは心底、彼女がうらやましかった。恋をしないからだ。

会社の廊下で、大量のファイルを運んでいる笹木と出くわす。わたしは運ぶのを手伝うと申し出た。彼の姿を見ているうち、ひどく残酷な気分になって「笹木君はなぜ、足が悪くなったの？」と訊ねた。

笹木は平然と「子どものころ、高熱を出したんです」と答えた。わたしは彼が機嫌を損ねなかったことに苛立ちを覚えた。

「お返しに、こちらも個人的な事をお訊ねしてもいいでしょうか？　百地主任と、私的な付き合いがあるんですか？」笹木は息をひそめて訊いた。「ええと、ご存知ですよね？　指輪はしてらっしゃらないけれど、主任には奥さんとお子さんがいます」

「わかってて付き合うのは、罪だと思う？」わたしは、笹木を見ずに訊ねた。

「いいえ、思いません」笹木は真剣に言った。「原爆を落としたパイロットに罪があると思いますか？」

「わたしが原爆を落としてしまったとしたら、きっと生きて行けない。罪を感じるからよ」とわたしは答えた。

「パイロットは命令されたとおりに実行しただけですよ。罪というものは、感傷的な戯言です。だから、罪だと思うかと聞かれれば『いいえ』なんです」

「慰めてるつもり？」

「いいえ、ぼくには何の関係もないことですし」

わたしはまだ残っているファイルをすべて笹木に押しつけて、書庫を出た。

再び、更衣室の自分のロッカーから、ごみの入ったビニール袋が三つも出てくる。警告のつもりでごみをいすに並べ、ロッカーを施錠した。

ナナフシの前足が取れた場所からは、

小さな前足が生えてきていた。今や手の平ほどの大きさになったので、ユニットバスをナナフシの部屋にあてた。ある時、わたしがシャワーを浴び終えて身体を拭いていると、彼女がわたしの左足を登ってきた。そして驚いたことに、卵を産み落とした。米粒ほどの大きさで、茶褐色の表面に細かい産毛をまとっている。卵まで、植物の種子に似ていた。

風呂からあがり、卵を大切にココットに載せた。姿見に映った自分の身体は白く、関節は脂肪を纏ってなめらかな曲線を描いていた。なぜ、わたしの腹には節がないのだろう？　戸棚を開いて油性マジックを探し出し、胴体に複数の線を引いていく。腹に節を持った姿はまるでナナフシの化身のようで、わたしは満足だった。

部屋へやって来た恋人は、ユニットバスの壁に張りついた彼女を見つけると、大きな声をあげた。

「おい、ふざけるのはやめてくれ」恋人は怒りを含んだ声で言った。わたしが真面目なのを見て、さらに驚いたようだ。

「この前のことをまだ怒っているのかい。だから、こんな当てつけのようなことを？」

わたしは恋人に、風呂場で起こったことを話した。彼女がわたしの身体に登り、産卵したことをだ。「彼女が教えてくれたの。わたしは、ただここに存在しているだけで満ち足りているのよ。生まれて初めて孤独を受け入れることができたの」

わたしはセーターを脱いで、腹に描いた複数の節を見せた。

「きみはナナフシに取りつかれているよ」深刻な表情で吐き出すように言う。

「おれのせいだ。おれが昆虫なんか与えたから。あのとき、すぐに捨ててしまえばよかったんだ」

わたしはなだめるつもりで、俯いた彼の頭を撫で胸元に引き寄せた。

「週末、またあの山へ行こう。あの忌々しい虫とお別れするんだ。いいね」

わたしは恋人の顔を両手で挟み、引き寄せて何度も口づけをした。「ねえ、知ってる？　ナナフシはオスがいなくても産卵するの。人間だって同じよ。男がいなくても、女は毎月産卵しているのよ。自惚れないで」

「おれのせいだ」恋人は目を手で覆って呻くように言った。「おれのせいなんだ」

「泣いているの？」

恋人は聞こえていないのか、顔を歪めたまま何も答えなかった。わたしは不安になって彼を揺さぶった。「ねえ、なぜ泣いているのよ」

朝から頭痛がしていた。恋人が山へ行く約束のメールをよこしていたが、返事できずにいた。

頭痛薬を買うため、更衣室へ行くと、施錠したはずのロッカーから着替えや荷物などが全て引っ張り出され、床にばらまかれていた。ロッカーの扉にはコピー用紙が貼ってあり、マジックで『どろぼうネコ』と走り書きしてあった。

わたしは紙を引きはがして、食堂へ向かい、いつもの席で食事をしている笹木の前にその紙を叩きつけた。「これ、どういうことよ？」

笹木は目を丸くしてわたしを見た。彼はめずらしくわたしの眼をまっすぐ見ていた。

「あなたがばらしたの？」

笹木はテーブルの上の紙を指で押し返した。「心外ですね。ぼくは言ったはずです。あなたのことは、ぼくにはなんの関係もない」笹木は早口でまくし立てるように言った。「あなたのことを周囲に噂する理由もないし、ばらしただろうと責められるいわれもない。そもそも、ぼくは他人の秘密を、ひそひそ噂し合うような友人を一人も持っていません」

わたしは何と言いあらわしていいかわからなくなった。確かに、その通りだと思った。

笹木は首を振った。「もういいでしょう。不愉快です。二度と話しかけないでください」

彼はわたしが視界に入らないようにうつむいて、食事を続けた。わたしは逃げるように食堂を出て、女子トイレに入った。洗面台に水を落とし、化粧が落ちるのも構わず顔を洗っていると、となりに人が立つ気配がした。あの日、恋人とカフェにいた女性社員がハンカチを差し出していた。

「柏木さん、大丈夫ですか？　具合でも悪いんですか？」

なぜ、わたしの名を知っているんだろうと思った。そしてすぐ理解した。「あなたなのね」

彼女はやけに黒目の大きい目を丸く見開き、すべてを手にしたかのような、満足げな微笑みを口元に浮かべていた。

「柏木さんはずるいです。だって、主任をひとり占めして」彼女は悪びれるふうもなく静かに言った。彼女の澄んだ声はひどく冷たく響いた。「そもそも、主任は、奥さんのものなんですよ。かわいい娘さんもいるんです。かわいい娘さんのお父さんを、汚い不倫男にしたのはあなたです」

「わたしだけが悪いって言うの？　彼は進んでわたしの部屋に来るのよ。彼が汚い不倫男だとしたら、そうね、もともとそういう人なのよ」

彼女は少し傷ついた顔をした。「だとしたら、相手が柏木さんだけじゃなくてもいいですよね？　わたしも主任をひとり占めしたいです。いいですよね？」

わたしは泣くのを必死にこらえていた。先ほどの笹木とのやりとりが思い出されると、急にこの状況が滑稽に思えて、吹き出してしまった。

「なぜ笑ってるんですか？」彼女は顔を歪めた。

その表情はあまりに残酷で露骨だった。美しいとさえ感じられた。

「原爆を落とせばいいんだわ」わたしはつぶやいた。「知ればいいの。もっと苦しいわよ」

意味を測りかねたようすで黙った彼女を押しのけて、わたしはトイレを出た。更衣室に散らばったままの私物を紙袋に詰めて行った。

もう、ここに来るつもりはなかった。恋人にも、もう会えない。いつかこうなることはわかっていた。だからやるべきことは決まっていた。

マンションの部屋へ戻って、荷物も置

かずにまっすぐ浴室へ向かった。バッグをトイレの蓋の上に置き、洗面台の栓をして水を溜める。バッグをまさぐって携帯電話を探すがみつからない。ナナフシは鏡のふちにつかまって、そのようすを見ていた。

もどかしくなって、バッグを逆さに振り、中身をすべて水の溜まった洗面台にぶちまけた。携帯電話は、ヘアクリップやハンカチや化粧ポーチと一緒に、蛇口から落ちる水が作る波紋の下に沈んだ。

音に驚いたのか、鏡に張りついていたナナフシがふいに飛び跳ねて、水の上に落ちた。

慌てて彼女を掬い上げ、タオルを敷いたトイレの蓋の上に載せた。じっと横たわって立ち上がろうとしないようすを見下ろしているうち、彼女がわたしに何を望んでいるのかがわかった。そうするべきだと促したのは彼女で、わたしは抗う理由がなかった。

わたしは玄関へ行き、靴箱の中から道具入れを引っ張り出し、金槌を選んで手に取り戻った。それが一息で終わるように、彼女の胸部に狙いを定めて金槌を振りおろした。悲鳴もあげず、逃げることもせず、ナナフシは自分の最期をすんなりと受け入れていた。わたしは金槌を放り出し、その場に座り込んだ。タオルごと彼女の身体を手繰り寄せ、頬を押しつけた。

わたしはいつか恋人と交わした会話を反芻していた。おれに何を望む？　何も。ただ覚えていてほしいだけよ。

笹木の家はごく平凡な平屋の一戸建てだった。玄関から門までには車いす用のスロープがあり、広い庭は雑草で荒れていた。公衆電話から会社に早引きの連絡をするついでに、彼の住所を聞き出したのだ。

「ナナフシを殺した」玄関の錆びた門扉に手をかけて、わたしは言った。

笹木は嫌そうだったが、仕方なしに招き入れてくれた。家の中は暗く、しんとしていた。

笹木はチェックのネルシャツの上に、緑色のカーディガンを羽織り、会社にいるときより幼く、とっつきやすく感じた。家の中では松葉づえで生活しているようだった。両腕でつえを握り、力いっぱい身体を支え、かろうじて力の入る左足で前に進む。

笹木はわたしに、居間の使いこまれた古いソファに座るよう勧め、自分は向かいのソファにドスンと座った。唐突に「ナナフシの死がいをぼくにください。標本にして記録するんです」と言った。

「叩きつぶしたのよ。形なんか残ってないわ」

笹木は辟易したようすで残念だと言った。

その時、わたしのお腹が鳴った。ずいぶん長い音だった。朝から何も食べていないのだった。

笹木はつえを取って立ち上がり、あごでついてくるように促した。わたしをキッチンのテーブルに着かせ、ガスコンロの前に置かれたスツールに腰掛けて、見事な手つきで玉子焼きを焼きあげた。

わたしたちはそれをおかずにご飯を食べた。卵焼きは柔らかく、砂糖としょう

ゆで味付けされていた。
「何か喋ったらどうなの？」黙りこくっている笹木に、わたしは言った。「そんなだから、女の子にもてないのよ」
「もてることが大事だと思ってないんで」笹木は悪びれずに言った。
じゃあ何が大事だと思ってるのか？と訊ねると「自立できているかどうかですね」と答える。
自立とは、感情や欲望を管理して、自分で消化し、さらに循環させることを意味すると言う。
「あとは単為生殖できれば完璧ってわけね」
「ええ、まあそうなりますね」笹木は投げやりに返答する。「柏木さんこそ、何かぼくに話があったんじゃないんですか？」
わたしは昼間の喧嘩のお詫びと、会社を辞める報告をした。そしてかつて小さかったナナフシを入れていたジャムの瓶を渡す。
「あと、これを貰ってほしくて」中にはナナフシが産み落とした卵が入っている。
笹木は目を輝かせて喜んだ。わたしはその姿がおかしくて笑ってしまった。笑いだすと止まらなくなって、涙があとからあとからこぼれ出した。
「泣くなら帰ってください」と笹木に言われ、「これがわたしの笑い方なの」と言い訳をする。
わたしのナナフシの卵はきっと上手に孵化するだろう。死んだあとは標本にされるかもしれない。でも、それも悪くない。
「知ってる？」わたしは訊いた。「笹木君の笑い方だって、引きつってるみたいにしか見えない」
笹木は笑った。けれど、それはやはり笑っているようには見えなかった。

島京子『雷の子』出版と地域文化功労者表彰を祝う会、開催

神戸エルマール文学賞基金委員会代表・島京子が、四月二十日（二〇一四）、『雷の子』（編集工房ノア）を出版。また昨年、長年の文芸同人雑誌活動の支援、地域文化貢献により、地域文化功労者表彰を受けた。合わせての祝う会が、同月二十九日、ラッセホールにて、百十名の参会者を得て行われた。